



享保仁政録

六

~ 13  
3364  
6





目録

石井保仁政録巻之六



大正十年八月廿九日  
本大學出版部贈

一 石井保仁政録 一冊の事

石井保仁政録 一冊の事

石井保仁政録 一冊の事

門 へ 13  
號 3364  
卷 6

享保仁政録巻之六

松川藩十部二件の事

享保三候いね八月いね廿七日  
甲子いね時辰いね十一日いね松川藩十部村  
松仙いねを席いね下いね村いね多いねのいね情いね申いね由  
古いね本いね通いねのいね筆いね山いね十いね馬いね河いね邊いね希いね子  
席いね初いね子いね席いねりいね自いね裁いね関いね屋いね小

島子若松のむが茶の島原  
の傳島自出のやまらら

あまのしらの十人選出茶の  
あつ松平新十郎のむが茶

通つまつしはつら  
自出のむが茶のむが茶  
のむが茶のむが茶

之ゆらむが茶のむが茶  
市しやらの自出のむが茶  
出立島原のむが茶  
自出のむが茶のむが茶  
と自出のむが茶のむが茶  
先はあつらむが茶のむが茶  
印のむが茶のむが茶



まよと浪人さくらもも拙者  
或生ごころるた格あま  
いふす者ごころざらぬ友  
お花しやし拙者惣たごも  
長なま ちやのり海を有  
しと何さあごころるる  
や福めもやごころるる  
まご神のり ちやのり海を有  
りしちのりごころるる  
まごり遠ごころるる  
まご生後 ちやのり海を有  
いごころるるごころるる  
ちやのりお園ごころるる  
奥村多のり喜しやごころるる  
海の中 ちやのり海を有  
ごころるるごころるる

まよと浪人さくらもも拙者  
或生ごころるた格あま  
いふす者ごころざらぬ友  
お花しやし拙者惣たごも  
長なま ちやのり海を有  
しと何さあごころるる  
や福めもやごころるる  
まご神のり ちやのり海を有  
りしちのりごころるる  
まごり遠ごころるる  
まご生後 ちやのり海を有  
いごころるるごころるる  
ちやのりお園ごころるる  
奥村多のり喜しやごころるる  
海の中 ちやのり海を有  
ごころるるごころるる

義知らししはさるる氏さるる  
しあはれ物にのりしに  
み疾しや事と出たてあはれ  
まこと右左のまをわか  
後人かごさるるはまはあつも  
りまらぬ其の中まのこ仁と知  
るもたらぬぬまの後の子  
良氏の希との明あはれ

すく出物あはれ作あはれ  
ぶぶらぶらあはれやあはれ  
まのい貴人も侍の事我  
りあはれまあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ







まゝい番女討と何と  
採つたあつたまゝに日かゝり茶入と  
ぬきふふ採其討と意印の  
ふゆと我あふ人のあつた  
まゝのぬき切腹仕の氏らあつた  
と出るる管の遠い心ゆりあつた  
かあつたぬき  
公儀ぬき  
はまのぬき

ぬき切腹と何と  
番女あつた下女を人伝の  
件あつた切腹と何と  
ふゆあつたぬきあつた  
まゝのぬき切腹と何と  
採つたあつたまゝに日かゝり茶入と  
ぬきふふ採其討と意印の  
ふゆと我あふ人のあつた  
まゝのぬき切腹仕の氏らあつた  
と出るる管の遠い心ゆりあつた  
かあつたぬき  
公儀ぬき  
はまのぬき



を頼りて 志願す 我々  
も 將軍 宗直 宗景 の 宗直  
に 出す 二 志願す  
屏の 女 病 女 二人  
切腹 する 事  
そん 後 一 年 一 月  
一 國 系 知 一 年 一 月  
さ 中 志 願 一 年 一 月

と 自 身 中 一 年 一 月  
め なる 松 平 新 中 隊 用 人  
と 一 年 一 月 志 願 一 年 一 月  
一 通 一 年 一 月 志 願 一 年 一 月  
角 の 中 隊 用 人 一 年 一 月  
た ち 一 年 一 月 志 願 一 年 一 月  
一 年 一 月 志 願 一 年 一 月  
と 一 年 一 月 志 願 一 年 一 月

少中入梅井久平長富つを  
母子生すけ梅井宗の文  
与千人半の戸国流母流の  
持あつたあもそ或る白人  
何のあつたあもそ或る白人  
持あつたあもそ或る白人  
母のあつたあもそ或る白人  
母のあつたあもそ或る白人  
母のあつたあもそ或る白人

三つおし梅井久平の何年  
けのあつたあもそ或る白人  
母のあつたあもそ或る白人  
母のあつたあもそ或る白人  
母のあつたあもそ或る白人  
母のあつたあもそ或る白人  
母のあつたあもそ或る白人  
母のあつたあもそ或る白人









めあふは一向といふに結多  
松村伝を命 甲田方と書つ  
まゝ人とは教家ののちを  
んまの市果中一りめ  
娘ちりしむししにしりしめ  
うしと 踏とんまに教家  
屋ちりしこの帷子玉糸子  
のあふはあふのあふのあふ  
まゝ人あふあふのあふのあふ  
おんあふのあふのあふのあふ  
おんあふのあふのあふのあふ  
是を拙者が娘にさす。  
屋しりあふのあふのあふのあふ  
さるあふのあふのあふのあふ  
まゝ人あふのあふのあふのあふ  
法徳あふのあふのあふのあふ

家<sup>か</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>家<sup>か</sup>友<sup>ゆ</sup>は<sup>は</sup>息<sup>いき</sup>女<sup>め</sup>は<sup>は</sup>も  
和<sup>わ</sup>生<sup>せい</sup>山<sup>さん</sup>平<sup>へい</sup>出<sup>で</sup>着<sup>ち</sup>者<sup>もの</sup>免<sup>めん</sup>下<sup>した</sup>り<sup>り</sup>も  
と<sup>と</sup>侘<sup>わ</sup>え<sup>え</sup>あ<sup>あ</sup>人<sup>ひと</sup>こ<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>存<sup>ぞん</sup>  
ぢ<sup>ぢ</sup>ず<sup>ず</sup>の<sup>の</sup>出<sup>で</sup>外<sup>がい</sup>今<sup>いま</sup>り<sup>り</sup>さ<sup>さ</sup>も<sup>も</sup>良<sup>りやう</sup>成<sup>なり</sup>な  
し<sup>し</sup>あ<sup>あ</sup>丹<sup>たん</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>是<sup>ぜ</sup>形<sup>ぎやう</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>よ  
を<sup>を</sup>す<sup>す</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>さ<sup>さ</sup>も<sup>も</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ  
持<sup>もち</sup>投<sup>な</sup>げ<sup>げ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>女<sup>にょ</sup>三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>も<sup>も</sup>  
年<sup>ねん</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>東<sup>とう</sup>凡<sup>ぼん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>花<sup>はな</sup>

二<sup>に</sup>階<sup>かい</sup>が<sup>が</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>力<sup>ちから</sup>水<sup>みづ</sup>輪<sup>りん</sup>あ<sup>あ</sup>り  
あ<sup>あ</sup>も<sup>も</sup>か<sup>か</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ  
な<sup>な</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ  
う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>頼<sup>たの</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>今<sup>いま</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>  
表<sup>あは</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>出<sup>で</sup>て<sup>て</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>玄<sup>げん</sup>冥<sup>めい</sup>  
の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>出<sup>で</sup>て<sup>て</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>  
押<sup>おし</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>  
大人<sup>おとな</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>







此目と此段の原を以て作すのら  
まゝに奥村多のき高しとて出  
西極のりつゝのりあめを  
たゞもきども拙志七千を力  
も海りしある花母が由在り  
て拙志の果も一も一人  
の毎肌渴のあふくを何とせ  
けしとてとて此段のりてあめ

切腹のり本控くてさしとて村に  
他を解すしとて此段のり  
云はるりしとて通りの拙者も  
八中へ入るあめを祀母七千  
あめあめあめ親父のたは病  
いしとて拙者切腹いしとて  
いしとてあめあめ病人が非  
後びとてとて此段のり

出船多形ひまら軍団六  
右衛門拙共向も六中一六中  
ある老母申風めくあそと  
あひく福受くくくあそ  
のり如妻が産後廟公為降が  
夜深とくは保しと歩終ひ  
くくあそくくくあそくく  
情くくあそくくあそくくあそ

まむくくあそくくあそくくあそ  
くくあそくくあそくくあそ  
者くくあそくくあそくくあそ  
くくあそくくあそくくあそ  
おのくくあそくくあそくくあそ  
くくあそくくあそくくあそ  
くくあそくくあそくくあそ  
くくあそくくあそくくあそ  
くくあそくくあそくくあそ





春に物忘れ居るに何ゆへに  
しほあはれなればいと  
中せむ名にこそゆへに作也  
ゆへにあらはれし結し切腹が  
あつやと母のゆへに人たや  
あはれなれどもあはれにや  
この世にふるあはれなる貴人  
が忠信結し悔も罪の付り

かき事なる事なれば  
又人をはりし  
由縁を知るにこそ  
久きうあはれに  
あはれに  
いふも事知はるあはれ  
あはれに  
あはれに  
あはれに

カ  
ハ  
マ  
ノ  
ノ  
ノ

徳入令後文の事

一 付及白系民を師及由礼ん

とも存せざるかあゆらむん

弟を我 五時五分

神と心得まじし由處也

入系(根)根籍(お)の(い)ん

子(ま)れ(の)足(ん)後(り)日(ん)

忍日入(ま)の(い)ん

之(い)ゆ(は)出(り)ぬ(る)小(を)あ(ら)わ(す)

付(り)ぬ(る)花(を)折(る)中(に)

ぬ(る)拙(者)も(も)切(腹)付(る)

屋(の)出(る)中(に)出(る)は(な)ぬ

得(る)も(も)あ(ら)ぬ(る)は(な)ぬ

ま(の)い(は)す(た)の(い)ん(は)根(子)見(ん)

屋(の)上(に)お(腹)付(る)は(な)ぬ

しころ男命下出程り  
由事知りしうまゝ  
あき仕方りな  
と又由子息取あし解り  
礼んしとせむはなるを色に  
出恨しめをこそせむ  
色の上出に候  
候あゆまの候り  
禮文

何れに候

言保三成年一日本七

と徳め候由名南をあらんと  
徳めものせむ久し拙者先二人と  
取を造りしる候由中人  
取を造りしものも初名子久し  
あま

月事取と姓及

湯井ヶ谷の石屋敷

中村角田の石屋敷

久石の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

石屋敷の石屋敷

奥村多之彦

日新所

布橋頭

村井 今昔終始人

村松仙左衛門

日新所

赤山子出流抱氏

勝田安齋

山條山

日新所

布橋頭

及原外記

甲田

右の通り

官形持人

と書判り



をきき 己野山々帝体換殺  
まの 好く 保中 西  
會の上 取め 帝を 引渡  
平九 帝 ころも ころも 取  
同屋 支西 橋 依  
のの のと 皆 一 料理  
茶屋の二階 一 あぐら 湯呑  
をさ へ け 交 及

の 出 入 行 止 遠 へ 寄 っ ち  
し っ の 細 っ っ っ っ っ っ  
出 親 又 又 又 又 又 又 又  
ら 福 也 其 也 一 帝 之 の 出  
家 也 の の の の の の の  
り 出 入 行 止 遠 へ 寄 っ ち  
屋 之 の 出 入 行 止 遠 へ 寄 っ ち  
出 入 行 止 遠 へ 寄 っ ち





がなをとりてすしと金子をぬき  
出さすの即是を救ふなり  
て出深ゆふなり 出礼を  
出程りまます 平左様ごさうに  
教の爲出徳をを忠くり  
まししと云々の徳を書かぬ  
別まじりの取らぬを徳し  
たの 知少のおり 出程やと  
し

乳母根岸由行の書  
松平何内もどくの抱中  
もい 海 徳を  
こし くらる 後を徳く  
身以てし 紙海の手徳  
あし 飛のまの  
取し 取のまの 取  
らば 取のまの 取

福多んと賢をも法くまら  
 飛くまよ平の席くまら海を  
 案も少く五通くまら  
 くの事くまら平の席くまら  
 平の席くまら山田分遠くまら  
 解くまらくまら

岩井

享保仁政條巻之三



永年馬鹿名

享保

